

# 丘陵地のため池魚類相の現状

～大阪府南河内地域におけるため池魚類相調査を通して～

吉村 元貴<sup>1,2</sup> ・ 浦部 美佐子<sup>1</sup>

1. 滋賀県立大学 環境科学部 環境生態学科      2. 市民団体 飛鳥川じゃこ取りネットワーク

## 背景・目的

日本の在来淡水魚の生息数は、減少の一途をたどっている。原因として、オオクチバスやブルーギルなどの外来魚の放流、ため池が放置されると水質はわずかな期間で悪化（加納ほか 2005）。特に外来魚の影響は深刻であり、オオクチバスとブルーギルは自然分布ではなく、人為的な移植の繰り返しによって分布域を拡大させている（村上ほか 2004）。

この様な状況の中で、丘陵地から山間部の人目に付きにくい小さなため池は、オオクチバスやブルーギルなどが侵入していないため、在来淡水魚の最後の砦の一つである。

最近、大阪府南河内地域の丘陵地のため池で、1978年の採集記録（財団法人日本自然保護協会 1978）を最後に採集記録の無いカワバタモロコが生息していることが判明した（吉村、未発表）。しかし、同地域には、まだ魚類相調査が実施されていない多数のため池が存在する。同地域のカワバタモロコ個体群の保全のため、ため池魚類相及び魚類分布情報は基礎データとして重要である。そのため、南河内地域におけるため池生息魚類相、及び分布を把握すること、南河内地域における外来魚の生息するため池の特徴等を把握すること、の2点を主な目的に、ため池に生息する魚類相を調査を実施した。

## 調査場所・期間・方法

カワバタモロコの生息地を中心に、Mapion（インターネット地図サービス）に記載されている、大阪府南河内地域内（羽曳野市・太子町・河南町・富田林市・河内長野市）のため池を調査対象とした。

調査は2010年4月下旬～10月上旬に行った。各ため池に5つのセルピンを1時間設置し、その後、タモ網によるすくい取りを岸から、1人で10分間行った。また、セルピン設置時に、ため池及び周辺環境調査を行い、外来魚の侵入しているため池、及び在来魚の生息しているため池の環境条件を、そうでないため池と比較した。

## 結果

魚類採集調査を実施した118のため池のうち、30のため池で外来魚（オオクチバス・ブルーギル・タイリクバラタナゴ）の生息を確認した。57のため池で在来魚の生息を確認した（図1）。また、外来魚の生息するため池の環境の特徴を、分析予定である。

## 最後に

本調査により、丘陵部のため池で、小規模なものは管理放棄による水質が悪化したり、ため池自体がつぶれている場所が多く、一方、規模の大きなものには、外来魚が放流されている場合が多いことが分かった。そのため、わずかに残った在来淡水魚にとって、ため池環境は楽観できない状況であると考えられる。今回の調査結果を踏まえ、現在行っているカワバタモロコの保全策について発表する。

種名	生息確認地点数
モツゴ	27
タモロコ	2
カワバタモロコ	1
ドンコ	6
メダカ	5
フナ類	22
コイ	9
ヨシノボリ類	6
オオクチバス	9
ブルーギル	8
タイリクバラタナゴ	5

尚、本調査は2010年関西自然保護機構助成を一部受けて実施した。

図1．採集魚類